
アカイト

磨兄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカイト

【Nコード】

N7439C

【作者名】

麿兄

【あらすじ】

萌えーっ、な世界ではよくあるお話。情けない男、戦うヒロイン、あとなんか色々と属性を持った女たち。そんなラノベ的なものに、リアルな戦闘描写と長ったらしいナレーション、ついでに諸々取り込んだ変なお話。1話がかなり短いので、暇潰し程度にどうぞ。あらずじじゃないって？その通り。本当に困った作者だねえ。

突然目の前に現れたそれは、どうやら俺の意見を聞く気は欠片ほども無いようで、ただ自らの三大欲求の一つ、詰まるところ食欲を満たしたいという事に意識の全てを注いでいるようだ。

現代における成人男性の平均的な身長よりは高く、細身な割に結構筋肉とかあるんじゃないかなんて持て囃されたりされなかつたりする俺は、それにとってはなかなか食べごたえのあるご馳走なのか、まだ地上デジタルや液晶なんかの流行に乗り切れていない我が家のブラウン管テレビほどもある大きな口から、妙に粘ついた涎をだらだらと垂れ流している。

「グフオ…グフ、グフ…」

ご丁寧に、くぐもった唸り声と共に、生ゴミ回収のゴミ収集車を四台ほど圧縮したような酷い臭いの吐息まで頂いた。

しかし本当に粘っている。さっき食べた天津飯のあんだつて、ここまでは粘っていなかつたな。なんて考えてる場合じゃない。あー、こんな訳のわからない怪物に食べられて俺の物語は幕を降ろすのか。どうせならケチらずに、ラーメンじゃなくチャーシュー麺にすればよかつたな。

などと瞬時の思考に流されていた時だった。ぱすっ。

表現しにくい間の抜けた音。無理に例えるなら、浮き輪に空気を入れる足踏みポンプを渾身の力で踏み込み、その勢いでホース部分が抜けてしまったような、そんな音だ。

晩飯の帰り道、街灯も申し訳程度しか存在せず、その明るさなど

街灯自身が萎縮しているかのようなこの道。左手には山。右手には林。近くに民家はなく、人通りは1日で俺の社会テストの点数とそれほど違わない程度にしかないような裏道。

浮き輪を膨らましたい人間などいるはずはない。

続いて聞こえたのは、滑らかなシルクを擦り合わせるかのような、しっとりとしているのに乾いた音。シルクシルくと、釣り糸が巻かれていく音に似ていなくもない。

さて、ぱすつと来てシルつと来て、目の前の怪物に今までにない動きが見て取れた。太く長い爪や牙をガチガチとぶつける訳でもない。反抗期のお子様がお父さんの臭いがなんだかんだと言う、その嫌な臭いとやらの数段上をいくような、何を食えばこうなるのか見た…くはないような口臭を俺に吐きかける訳でもなく。

俺を主体に考えれば絶対的に敵であるこいつと、俺自身が運命的な出会いを果たしてから数分だろうか。この短く長い時間の中で、こいつは初めて自発的ではない行動を取らされたようだ。

くん、と右腕を空へ向けて高らかに上げた。叩き潰されたりするんだらうかとか、その太い腕と空の月が綺麗に重なってるなとか、今までと変わらず思考を巡らせていた時。

上げられた腕は半分から上を中空へと放り投げた。重なっていた月が、今はよく見える。代わりに目の前に、ふわりと降り立つ人影ひとつ。なんでもいいが、化け物といい、こいつといい、あまりに説明無しに他人様の前をちよろちよろするのはどうかと思うぞ。

向こうで片腕を失って苦しむ化け物は、恐らく義務教育すらまともを受けていないだろうから多少の事は許してやらない事もないと情状酌量の余地は多少なりとも残されているが、いやそれにしても俺を喰らおうというのは許せないが。

片腕？

主を失った、さつきまで右腕だった物が空中で見事なムーンサルトを披露し、新たに月と重なる人影を飛び越え、ご馳走だったはずの俺にウインクするかのように月光をその長い爪に反射させて、ぼ

とりと鈍い音と共に着地した。

俺は新体操の評価基準など勿論知らないが、恐らく今の着地はあまりいい得点は貰えないだろう。

「27万円……」

月を背負った人影、俺を救う形となったこいつはどうかやら人間、それも綺麗な声の少女のようだ。しかし俺はそんな大金持つてはいないぞ。

命を助けてもらって27万円を請求されるといふなら安いものだが、バイクを買うために必死で貯金している銀行口座にも、情けない事にまだ8万円しかいらっしやらない。もしどうしてもその金額をご所望なら他を当たってくれ。

ひゅぱっ。

続いての音は、左腕を送り出す擬音のようだ。今度は宙を舞う事なく、一直線に俺に向かってきた腕。

ああ、このコースは直撃だなとか考える暇もなく、切断された左腕は俺の頭を激しすぎるほどにノックして、あまり綺麗ではない着地を見せてくれた。

ぐるりと世界が縦方向に回る。違うな。多分これは俺自身が真後ろに倒れてるんだな。

遠のいていく意識の中で、幻を見たような気がする。しかしあまり人様には言えないような、自分が欲求不満であることを胸を張って主張するような幻。

目の前にはすらりと伸びる白い脚。その奥には神々しいまでに純白の……何を見てるんだ俺は。惜しい、非常に惜しい事に俺はここで意識を失い、純白の楽園を認識できないまま気絶してしまった。惜しいことに。

式 740円

目が覚めるとそこはいつもの風景。見慣れた部屋。そうだ、ここは俺の部屋だ。

なんてことはなく。学校帰りにある行き着けの小さな中華料理店で天津飯とチャーシュー麺：じゃない、ラーメンを食ってまったり帰路についていたら、唐突に命の危機に晒され、なんだか知らない間に白いパンツ：じゃない、怪物に襲われて気を失ったこの道。

そう、この道。

ここで気絶したんだから、ここで目が覚めるのは至極当然だ。

特に目立つた傷も見当たらない。涎でできた、間違はなく心地よい匂いはしないであろう水溜まりも、その涎の主から解き放たれ、自由な鳥のように空を舞った腕も、月を背負った少女も、どれも見あたらない。

ただひとつ、いつも通るこの道にある変化とえば、いつもは月が見下ろす山道なのが、今は眩しいお日様が真上から見守ってくれているくらいだ。

…真上？

のっそりとした動きで、ポケットから携帯を取り出す。着信履歴は最大数を越え、受信メールもいつもからは考えられないような数になっている。

それらを確認する前に目に入った四つの数字。まだ朦朧とする意識を急激に現実に取り戻す魔法の数字。

11時38分。

どうやら学校には遅刻らしい。いや、それはどうでもいい。遅刻自体は日常茶飯事なんだから。問題はタイミングだ。昨日俺は記念

すべき50回目の遅刻を見事記録した。担任教師はまさに烈火の如く怒り狂い、次に遅刻したら停学も考えたと殺し文句をぶち当ててくれた。

我ながら実に短絡的で、現実から目を背けた逃避行であるとは思うのだが、如何せん昨日の今日でいきなり遅刻は有り得ないだろう。この場合、体調不良で寝込んでいましたとか適当な理由をでっち上げて休んでしまふのが得策だと思うのだが、どう思う？俺。

うんうん、確かにその通りだ。言われてみれば俺は昨日化け物に襲われたんだ。一家団欒で食卓を囲み、テレビの芸人を見て仲良く笑っている家族がいたりいなかったりする時間を見るのを果たして白昼夢と呼んでいいのかわからないが、まあそれで無い限り、俺は命の危機に直面していたんだ。

1日くらい学校をサボって何が悪い。

と、自分の脳内会議での議題が尽きてきて、最近注目のグラビアアイドルの話題に移り始めた頃、いつもなら毎日の昼食を調達するパン屋の前に着いていた。仕方ない。今日の昼食もここで調達しよう。

「ちようどいいトコに来たわ。コーヒー牛乳と玉子サンドとチョココロナ代、合計370円。あんた貸してくれない？」

これが新手の逆ナンなら、その斬新さではギネス級だと思う。

自動ドアを開けた途端、俺の胸元くらいしかない少女が、小さな手をこちらに差し出していた。どうやらこの手に、彼女の要求である370円を乗せてやれば満足するらしい。新聞にも雑誌にもネットにもそんな情報は流れていなかったが、恐らくそれだけは間違いないだろう。

「…おじさん。この娘は何なんですか？」

「何でもいいから早く！」

「いやあ、どうやら財布を忘れちゃったみたいだね。後でお金は持ってくるから、とにかくパンをくれって言ってるんだよ」

なるほど。事態は理解した。パン屋の店主も困り果てているようだ。

「ちょっと聞いているの？」

おじさんには悪いが俺は腹が減ってるんだ。とりあえずこの空腹を満たしてから問題に取り掛かりたいと思い、トングの剣とトレーの盾を両手に構え、並み居るパンというモンスターをバツバツサと打ち倒していった。

「無視するなんて、あんた礼儀つてものを知らないの？ちゃんとお金は返すから、とりあえずあたしに370円貸しなさいよ」

昨日あんな事があった後だ。あんな事の内容については後々考えるとして、とにかく体調が悪い…ような気がしないでもない。今日の昼食は控えめにしておこう。

「せめてあたしと目を合わせなさいよ！ これじゃああたしがただ一人で騒いだけじゃないの」

トレーをおじさんに手渡す。店主はどうにも少女が気になるようで、チラチラと横目で見ているものの、俺という正真正銘の純度100%な客を前に、会計を済ませるしかなかったようだ。

「ああ、いつもより少ないね。370円だよ」

予め計算しておいた料金を支払い、商品を受け取る。

「少しお金が多い様だけど、これはそういうことでいいのかな？」

気恥ずかしいので、小さく頷いて、片手に持った袋を少女に差し出してやった。

「え？ 知らない間におじさんと交渉でもしたの？」

念願の物を受け取った少女は、きよとんとした顔で俺とパン袋を交互に見比べている。壊れかけたブリキの玩具のようで、なんだか可愛らしい。

店主に支払ったのは740円。

まあ、そういうことだ。

「あんだ、なかなか物わかりがいいわね。やるじゃない」

パン屋から出た途端にチヨココロネにかぶりつく少女。

別に感謝されたい偽善心でも、この後どうこうといった下心でもなかったが、お礼のひとつくらいはあっても罰せられたりはしないと思うぞ。

「もうちよつと早く状況を把握できれば1人前ね。ま、頑張って精進なさいよ」

極々平均的で一般的な林檎すら頬張れなさそうな小さな口で、学校の体育館三つ分ほどの大きな台詞を吐く。

法律とモラルと一般常識がなければ、彼女は2、3発殴られているだろう。誰かに。あくまでも誰かに。

少女は引き続きチヨココロネをもにもにと食べている。なんだか食欲が一気に失せた代わりに、得体の知れない疲れがどつとあらわれた。

参 蜘蛛女

少しばかり、時間は巻き戻される。

「で、報酬はいくらだった？」

あたしはまったく触れないパソコン。それに向かってカタカタと、なんだか色々やってる相方に訊く。

「30万円ですわ。ただ、前回の任務で破損した右第3パレット外装補修の代金を差し引いて…」

「長い！さんじゅうまんです、でいいの」

「あら、ごめんなさい。気をつけますわ」

任務の選別や交渉、装備から家賃や光熱費の管理まで、あたしが生きる為にはこのコがないとどうしようもない。

名前はパール。機関から与えられたコードネームではあるけど、それがあたし達の全てだから、何か特別なコトを思ったりしない。

丁寧な話し方と、おっとりした物腰、綺麗な顔立ちによく似合う眼鏡、どこかのお嬢様と言われても簡単に信じちゃいそうな、とにかく綺麗なコ。

話が長いのが玉に傷かな。

「任務の選別は終わりましたわ。夕飯のメニューは何がよろしいですか？」

「数時間したら汚いクリーチャーとお遊戯しなきゃいけないし、ご飯は終わってからにする」

あたしの任務は、化け物退治や暗殺がほとんどだ。それに適した能力を持つちゃったんだから、文句も言えない。

「それでは、クロウが戻る頃に合わせて、食事とお風呂を準備しておきますわ。なんだか新婚さんみたいですね」

「どこが」

んで、名前がクロウ。この名前があたしを表す全て。

機関に与えられたコードネームを掲げ、与えられる任務を消化し、金銭を与えられ、命を食いつなぐ。消えていく命の上で、あたしは命を育むしかない。

これがあたしの生き方。特別なコトなんて、考えない。考えないよ。

警告音が鳴る。隣近所には聴こえないような低い音で、その出現を知らせる。

手早く装備を整える。といっても、腕にパーツをはめて、小物が入ったポーチを付けるだけ。

「じゃあ、行ってくるね。通信よろしく」

言いながらベランダの手すりによじ登る。

「はい、頑張ってくださいね。でも怪我には十分注意してくださいね。せつかく可愛いクロウの顔に傷でもついたら…」

「…長い」

あたしたちの拠点はマンションの一室。地上18階と、かなり見晴らしのいい場所だ。あたしにとっては、これ以上ない最高の場所。

「ぶっ飛んでくるね」

「いつてらっしやい」

重力に身を任せる。ふわりとした浮遊感。手すりから離れたあたしという一つの物体が自由落下を始めるまでの刹那、あたしの身体は擬似的な無重力状態になる。触れない水の中にいるような、なんとも言えないこの感じは、いつもあたしの気持ちを持らしてくれる。

人間は羽根を持ってない。飛び降りれば勿論、落下する。

びゅうびゅうと耳を叩く風の音。内臓をまとめて全部持って行くとする重力。落ちていく景色。近づく地面。ぱすつ。

あたしのもう一つの相方から射出されたアンカーが、隣のビルに突き刺さる。気を集中すると、アンカーに繋がれたワイヤー、あたしを繋ぐ極細のそれがピンと張り、あたし自身を持ち上げ、落下の衝撃を全て解消してしまった。ほぼゼロになった勢いのまま、冷たいコンクリートに降り立つ。

「よし、行こっかな」
ぱすつ。

目に付く一番背の高い木にワイヤーを絡め、自分の体を空中に放り投げてやる。高さが頂点に近づくと、逆の腕からワイヤーを放ち、どこかの蜘蛛そのままに夜を駆けていく。

今日は月が綺麗だなあ。

四 お迎え

誰か。誰でもいいから、今の俺が陥っている状況の、その陥った理由、経緯を教えてはくれないだろうか？

「もう何してんのよ。早く歩きなさいよ」

やはり自らの不遇は自らでキチンと受け止めるしかないだろう。

まず、ここにいる少女。パン屋で犯罪ギリギリな行動に出ている傍若無人オラオラなあ少女だ。正しくはここにいると言うより、背負っている、いや背負われている少女。

勿論、俺に。

彼女の昼食と思われる代金を払わされた挙げ句、その少女を背負わされている。

一部の、ごく一部のお兄様方には多大なる需要があるとは思いますが、残念ながらこのような少女にあれやこれやと色々掻き立てられるような趣味は、17年生きてきて自覚した事は一度もない。

どちらかと言えば、世を騒がすびうちぴちなグラビアアイドルのように、ボンキュッボンとしたグラマラスボディーの方がグツと、グツと来る訳だよ兄弟。わかってくれるはずだよな、ブラザー。

脱線した。

今日はせっかくサボるんだから、気持ちよく昼食をとり、より一層この自由を満喫してやろうと、近くにある自然公園へと歩き出した。

パン屋が見えなくなった頃、不意に制服の袖を引っ張られた。犯人は勿論、例の少女だ。

「ふあんふあひはへふっへひっはへひよ」

「よし、何でお前が付いて来てるのかは後で聞いてやるから、まず

はその口から溢れ出したチヨココロネをなんとかしてからにしようか」

少女はリスみたいに頬を限界まで膨らませ、ぐるぐると巻かれたイースト菌たちを俺が想像している以上に空っぽなのである。胃袋へと送り込もうとしている。

可愛らしい顔立ちが、今は出来損ないのお面のようになっていて。ミスなんとかになってしまいそうな彼女だが、今の状態のお面は間違いない。年内に無事売れるかどうか、かなり怪しい。

面積の狭い顔にある小さなパーツをぎゅっと窄めて、頭の中から爪先まで全身をしつかりと使って一生懸命にそれを飲み込んだ。

そんなに一気に食べる必要もないだろう。

「お金！ 返すって言ったでしょ！」

そういえばそんな事を言っていたような。元々返してもらおうとは思っていなかった。完全に忘れていた。

「それは俺の奢りでいいから、お前は帰ってくれ。…ふてくされるのは自由だけど、ちゃんと前見ないと転ぶぞ」

「子供扱いしないでよ。あたしはこう見えてむぶっ！」

「むぶ？」

なんと表現すればいいのか。あえて言うなら不機嫌になってそっぽを向いてしまい、割と高めな段差に気付かずに躓き、左手に持つパン袋と右手に持つコーヒー牛乳のおかげでガツリシツカリ顔面から地面に正面衝突したような声。いや、音といった方がしっくりくるか。

「痛い…すごく」

俺はもしかしたら超能力を持っているのかもしれない。ほぼ考えたままに、彼女は地面に突っ伏していた。

少しだけ違うのは、どうしても両手の食料を守りたかったのか、通常とは90度ずれた形で万歳をしていた。そんなに喜ばしい事があったのか？

「大丈夫か？」

「これが大丈夫なように見える？」

「パンは間違いなく大丈夫みたいだぞ」

俺に責任はこれっぽっちも無いのは明らかだが、恨めしそうに俺を睨みつける少女。

これ見よがしに左足を撫でる少女。

ひそひそと何かを話している通行人A。

「歩けない」

「そうか」

「歩けないの」

「ほふく前進って知ってるか？」

「おぶって」

まあ、そういう事。

自然公園に着く頃には、背中に寄生した少女は優雅に食事を終え、俺の額は煌びやかな青春の象徴の滴に占領されていた。

「ねえ、あんた名前は何て言うの？」

「他人に名前を…聞く、時は自分から…名乗るのがマナー…だろ」

「男から名乗るのも礼儀じゃない？」

よく回る頭と口だ。その外見と併用すれば、詐欺とかなんかそういうのを綺麗にキメてしまえそうだ。

「…椿。桜井椿だ」

「なんか花ばっかりね。あたしはクロ…うーんと、クロ子よ」

なんだそのネーミングセンスは。俺がお前なら、何が何でも改名するぞ。

「で、そのクロ子はいつまで俺に乗っかってるんだ？」

「もうちょっとだけ待ちなさい。多分もうすぐ迎えが来るから」

この世に生を受けて17年。これほどまでに待ち遠しいのは、幼稚園で迎えを待っていた時以来じゃないだろうか。

おむかえまだかな。

伍 会話

「何してんだ？」

「パー：パー、トナーに連絡とれないかなって再確認」

「その携帯、完全に沈黙してるように見えるんだが、俺の気のせい
か？」

「沈黙？ どゆコト？」

「とりあえず形式上お前の言う通りにクロ子と呼ぶが、クロ子は携
帯買ってもらったばかりなのか？」

「ずっと前から持ってたけど、普段は通信機があるから携帯電話っ
て使わないのよ」

「通信機？」

「あの、アレよ。迎えに来てくれる…えー…妹とのプライベート回
線があるのよ」

「どこかのご令嬢が何かでございますか？」

「ま、まあそんなト」よ」

「しかしその妹に連絡できないんじゃないか、どうしたって迎えに来てもらえないんじゃないか？」

「あたしのカラダ…携帯にGPSを仕込んでね。あたしの帰りが遅いと迎えに来てくれるのよ」

「…よく迷子になるんだな。そうでなければそんな物付けられないよな」

「うるさいっ！ 子供扱いしないで！」

「あつぶねえ…急に暴れるなよ、ベンチがひっくり返るところだったぞ」

「あんたが悪いんですよ」

「あんたあんたって、ちゃんと名前は言っただろ？」

「ツバキ、だっけ？ 別にいいじゃない。小さいコトばっか気にしてると器の小さい男になるわよ」

「こいつ…」

「ねえねえ」

「ん？」

「チヨココロネ食べないの？」

「急に食欲が失せてな。なんでだろうな？ なあ？」

「あたしがわかるはずないじゃない」

「本当に、こいつ……」

「いらないんなら、あたしが貰ってあげようか？」

「欲しいならそう言えよ。パンのひとつやふたつ、いくらでもやるよ」

「じゃ、仕方ないからあたしが食べひえはへふへ」

「口に物を入れながら喋らない」

「ふぁーい」

「いい天気だな」

「もにもに」

「風が涼しくて、でも日差しは暖かくて、草や土の香りがして」

「もにもに」

「制服に拘束されていないなら、もっと気持ちよかったんだろうなあ」

「もにもに」

「……」

「もにもっ…あ！」

「なんだ、どうかしたのか？」

「あたしが買ったのよりチヨコが多い気がする」

「どこまでもどつでもいい上に、驚愕した点の度合いがあまりに小さすぎる」

「もにもっ」

「…はあ」

「もにもっ…！」

「奇妙な租借音で感情を表現しない」

「パールー！」

「真珠？」

「ごちそうさま。アレがあたしのお迎えよ」

「やっと解放されるのか」

「なんか言った？！」

「特にこれといって何も」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7439c/>

アカイイト

2010年10月10日02時10分発行